



ボランティア再考

阪神・淡路大震災は、破壊と絶望のなかから人間への信頼と共感による多くの市民の自発的活動を生みだした。震災後7年を経過した現在、多様で創造的なボランティア活動は、その活動の深さと広がりを一層拡大し、われわれに共感と連帯に基づく「かくあるべき社会」の誕生を予感させてきている。

ボランティアの魅力とその力の源から創りだせる新しい社会関係を、私のささやかな体験と金子郁容、花崎阜平、高史明の考え方から探ってみよう。

私は、ある日視力障害者から「地下鉄の駅までつれて行ってほしい」と声をかけられ、駅まで案内した。その人の感謝の言葉を受け取り、自分の行動にささやかな自己満足を覚えてその日は終わった。

しかし次の日には、「果して駅の改札口まででよかつたのだろうか。プラットホームまでではなかつたのか。否、電車に乗るところまで必要ではなかつたのか」と次から次へと自分のとった行動の妥当性をグズグズと考えてしまった。

しかし、不思議なことに「これからも、できれば頼まれなくても自ら積極的に声をかけ案内しよう」という思いになっていた。

私は、他人から自分の行動を非難・攻撃されることからではなく、「自分の自発的な行動が自分に返ってきて自分自身を問うことになるところにある」とする金子の「自発性のパラドックス」の渦中に自らを投げ込み、なにをどこまでどのようにするかをすべて自分で決めなければならないボランティアの「つらさ」をわずかでも体験することになった。

金子は、ボランティアとして「なにをどこまでどのようにするか」の決定を、「外にある権威」によって正当化できるいわば「保護の外套」を脱いでしまうところにその「つらさ」の原因をみている。金子は、相手へのかかわり方を自ら選択する「ひ弱い」「傷つきやすい」「他から攻撃を受けやすい」状態に

ボランティアの魅力とその力の源を見出す。

花崎は、「だれもが人を傷つけ、人に傷つけられる可能性を逃れられない」現代の支配的な人と人との関係性を克服する萌芽を、金子の「ひ弱く傷つきやすく他から攻撃を受けやすいボランティアの選択」に見い出している。このボランティアの相手へのかかわり方の選択が創りだす人と人との関係性を、他者から力をもらい元気づけられ、自分自身がひろがる相互依存関係における授受の関係を紡ぎだす過程と位置づけ、「社会的な人と人との関係におけるアイデンティティと共生の文化・倫理をどう築くか」の課題に対する1つの回答と、花崎は考えている。

私たちは、この関係性の克服の出発点に花崎の言う「われわれは、悪と加害への可能性に絡みつかれた危うい存在であるという自己把握とお互いにそうだという共感に基づく同等の意識」を置く。

そのうえで、私たちは、自分の身近なところでさまざまな問題をもって苦しんでいる人達とその問題の一部として存在する自分を認識し、相手へのかかわり方を自ら選択し、支え合い、具体的な行動を通じて人と人が繋がっていく場を構築する。

私たちは、こうしたわれわれの生活のあり方を変える具体的な行動を通じて、高の言う「人間が人間として存在するための本質的な優しさ」を人と人との結合原理とする「希望を紡ぎあう」新しい社会関係を、創りだせるのではないだろうか。

たかみ まさはる

略歴 1948年 兵庫県 生
1971年 兵庫県入庁
1997年 兵庫県西播磨県民局地域振興担当参事
2000年 兵庫障害者職業能力開発校長
1997年～2001年
立命館大学非常勤講師